令和３年度滋賀県環境審議会環境企画部会（第１回）概要

１　開催日時　　令和３年（2021 年）９月７日（火）　10 時 00 分から 12 時 00 分

２　開催場所　　滋賀県大津合同庁舎　７－B 会議室

３　出席委員　　小川委員、石川委員、上村委員、岸本委員、坂下委員、高橋委員、柄本委員（代理）、中野委員、西野委員、仁連委員、前畑委員、溝江委員、南村委員、山田委員
（以上 14 名）

４　議事
（１）第五次滋賀県環境総合計画の進捗状況の点検ついて
（２）第三次滋賀県環境学習推進計画の進行管理について（最終まとめ）
（３）第四次滋賀県環境学習推進計画の進行管理方法について

【配布資料】
滋賀県環境審議会環境企画部会委員名簿、配席図
資料１－１　第五次滋賀県環境総合計画の進捗状況の点検について
資料１－２　滋賀の環境2021（令和２年版環境白書）原稿案
資料２　第三次滋賀県環境学習推進計画の実施状況（令和２年度）について
資料３　第四次滋賀県環境学習推進計画の進行管理方法について
参考資料１　第五次滋賀県環境総合計画（概要）
参考資料２　滋賀県環境学習推進協議会委員名簿
参考資料３　施策の体系（６つの柱）別の評価イメージ

５　議事概要
（１）第五次滋賀県環境総合計画の進捗状況の点検ついて
○事務局から資料１に基づき第五次滋賀県環境総合計画の進捗状況の点検ついて説明。

（委員）
『環境白書』にされる予定の資料１‐２の１枚目について、湖辺域の項目が、琵琶湖の水草、琵琶湖のヨシ、琵琶湖漁業の漁獲量（貝類）、希少野生生物種とあるが、貝類を湖辺域に分類することについて議論があったと思う。希少野生生物種については、湖辺域だけではなく湖中や山にもいる。そういう意味で、ここに入れても良いのか。一般の方が見られた場合、誤解を生まないために脚注か何かを入れたらどうか。

（事務局）

ご意見を参考にし、分かりやすくなるよう工夫したい。

（委員）
資料１－１の４ページから５ページの評価指標の進捗状況について、目標値が過去数年間で変わらない指標もある一方で、毎年変わっている指標もあるが、そこの基準がよくわからない。毎年目標値が変わっているのであれば、その理由を書き加えないと、目標値が恣意的に感じる。

（事務局）
それぞれの分野ごとの計画で状況が違うため、そのような記載となっている。どのようなことができるのか、少し参考にさせていただく。

（委員）
資料１－２の７ページの北湖の全循環欠損、全層循環未完了で溶存酸素が低下していると記載されていて、その上に、硝酸態窒素も増えていると記載されている。溶存酸素が低下していることは理解できるが、「硝酸態窒素の増加は大型緑藻が増えたから」となっていて、全循環欠損と、大型緑藻の増加と、硝酸態窒素については、どちらがきいているかというのが分からなかったので、教えていただきたい。
硝酸態窒素や溶存酸素の変化などは、一般の方には分かりにくいテーマだと思うので、何か分かりやすい工夫というのがないかと思う。

（事務局）
水・土壌・大気部会のほうでも議論があると思われるため、そちらと整合を取りながら、まとめさせてもらいたい。

（委員）
資料１－２の７ページの「２．北湖深層部の溶存酸素および水質の状況」の参照として、「『琵琶湖の水深別水質調査』の今津沖中央底層における溶存酸素濃度の図参照」と書かれているが、これが何ページになるか分からないため、ここにページ数を入れていただくと分かりやすいと思う。

（事務局）
修正させていただく。

（委員）
資料１－２の２８ページについて、魚のゆりかご水田の取組状況の推移が、近年横ばい傾向にある理由はあるか、また今後これをどのように増やしていくのか教えていただきたい。

（事務局）
担当課と共有し、回答させていただく。

（委員）
資料１－１の３ページの表の評価指標と評価区分についてＢやＣがよく目立つ。このＢについて、滋賀県としては、どう考えているか。成績としてはあまりよく見えない。

（事務局）
県としては達成を目指すスタンスだが、このＢでは、現在の施策の着実な進行によって、改善が読み取れるというところ。

（部会長）
目標の性質によって A,B,C の意味合いも変わってくる部分がある。目標について、どういう目標なのか性質の違いを説明しておいた方がよい気がする。

（事務局）
それぞれの指標が相対的にどう評価できるかといわれると、そういう関係にはないため、少し工夫が必要だと認識している。
この表に対する注釈を付けるのがいいのか、もう少し総合的評価の文章の表現の中にそういうことを取り込んでまとめていくのがいいのか、そこは工夫をさせていただきたい。

（委員）
環境こだわり農業とオーガニック農業の使い分けや優先度がどのような扱いになっているか教えてほしい。

（事務局）
10 の分野ごとの施策の方向性に基づいた評価であり、どちらかを優先するということはない。環境こだわり農業とオーガニック農業の２つの指標があるが、指標については、昨年度に議論いただき、このような位置づけとしている。

（委員）
資料１－１の７ページから８ページにかけての「持続可能な社会を支える学びと暮らしの定着」について、このコロナ禍において公共交通の利用が非常に減っていて、自家用車に流れるということが起こっているが、滋賀県において CO2 排出で車の占める割合は相当多いため、言及したほうがが良いのではないか。

（事務局）
CO2 排出量は、集計がすぐにできないため記載は難しいと思われるが、意見を担当課と共有し、どのような書き方ができるのか、検討させていただく。

（委員）

資料の１‐１の４ページから５ページにかけて、この指標が年によって変わるなどのことから、指標の性格付けが必要ではないかと指摘があったと思うが、環境総合計画は他の計画から数値を持ち寄ってつくり上げていると思われるため、すべて注釈で説明することは、煩雑になって非常に難しいと感じる。

次善の策として、それぞれの指標がどの計画から持ち込まれているものなのかを備考などで付けるだけでも、その目標値がなぜそういう目標になったのかが伝わると思う。

（部会長）

それぞれの部局の個別の計画の指標を引っ張ってきているという面で、なかなか統一性が取れていない。そういう意味では、全体的な総合的評価という点で、この第五次の総合計画の視点からの総合的評価を大事にしていただきたい。

総合評価の総括を見ると、「良くなってきている」という評価だと思うが、滋賀県の環境を巡る事態は非常に深刻な状況に来ていることから、これまでの前進・頑張りだけでは対応できないというようなニュアンスが伝わるとよいと思った。

というのは、CO2 ネットゼロを一つの目標にしているが、現在の CO2 の削減のペースでは間に合わないと思われる。何か、そういうことが伝わることが必要。また、全層循環が２年間にわたって止まってしまった、琵琶湖の生物多様性がなかなか回復しないなど、こういった課題の解決を図るためには、もう一段の努力が要るということで、マザーレイクゴールズというのを設定して、行政だけではなくて、県民運動として進めようとしているため、そういったことが総括評価で伝わるようにしていただきたい。

個別の評価については、それぞれの担当部局でやっていることなので、総合評価についてご意見をいただいたらと思う。

（委員）

資料１－１の８ページの総括について、「新型コロナウイルス感染症の影響により」と書かれている。また、使い捨てプラスチックの増加は本当に目立っている。保健所などと連携して、テイクアウトの際は、容器を持参する取組などを飲食店などにＳＤＧｓや琵琶湖の問題と絡めて推進していく取組など、このコロナ禍により新しい行動に変えられるチャンスだと思う。そういう行動の後押しをしてくれるような、資料になっていただけたらと思う。

（委員）

資料１－１の３ページの評価指標と評価区分について琵琶湖の生物多様性そのものを評価する指標というのが入っていないのが少し気になる。琵琶湖の生物多様性の評価指標というのも、今後検討していく必要があるのではないかと思う。

（委員）

琵琶湖でもマイクロプラスチック問題はあると思うが、資料のどこに入っていくのか。

（事務局）

マイクロプラスチックの問題は県でも調査しており、存在していることを確認している。ただ、生物へ

の影響があるかというところの知見はほとんどない。
　プラスチック削減としては、この環境負荷の削減、低減というところでは入れているが、マイクロプラスチックのことは、具体的に総括の中では書いてはいない。

（委員）
　プラスチック削減の取組の中で、基本的なことをもっとできないかと思う。レジ袋の削減の他にもあるのではないかと思う。

（部会長）
　レジ袋がなくなっても、いろんなところにプラスチックが使われている。根本から見直しをすることが必要になってくると思う。
　市民、県民、事業者が一緒になってやっていかなければならない課題だと思う。

（委員）
　資料の１‐２の２０ページの「早崎内湖再生事業」にある植物確認数、魚類確認数は外来種も含めたものか。

（事務局）
　魚類確認種数という中に外来種と在来種分けて標記している。植物については確認させていただく。

（委員）
　資料１－２の７０ページ、歴史的文化遺産について、国と県で分けて、記載してはどうか。また、国宝および重要文化財はなぜ記載しないのか。

（事務局）
　担当課とも情報共有し、どのような書き方ができるか検討する。

（委員）
　毎月、県の職員の意識改革を含めて滋賀県庁と地方事務所の電気使用量、ガス・水道使用量の集計結果を前年度比で全職員に配信されたらどうか。これは提案。

（事務局）
　提案として受け止めさせていただく。

（委員）
　資料１－１の８ページの「総括」のところでグリーンリカバリーという言葉が使われていて、「グリーンリカバリーの観点からもあらゆる取組を加速化し、環境と経済・社会活動のつながりをより一層強化できるように取組を進めていきます」と最後にくくっているが、グリーンリカバリーという言葉は新し

い言葉でもあるので、個別具体のことをしっかりと書いたほうがより分かりやすいと思うので、検討いただけるとありがたい。

（部会長）
１つ目の議題を終える。いただいた意見等を踏まえて『白書』に反映させていただきたい。

（２）第三次滋賀県環境学習推進計画の進行管理について（最終まとめ）
〇事務局から資料２に基づき第三次滋賀県環境学習推進計画の進行管理について説明。

（委員）
２ページ目の６つの柱は体系立てているシステムなので、独立しているものではなくて、お互いが相互に関連し合っているものだと思う。そういう観点で進行管理や評価していく必要がある。
６つの柱の事業がうまく動いていけば、ギアモデルのギアがうまく動いているだろうと捉えるとよいのでは思う。
また、ギアの中を見たときに、「学ぶ」がしっくりこない。「学ぶ」というのは、すごく広い上位の概念で、その下の概念として、「考える」があったり、「気づく」があったり、「行動」があったりする。
もう少し「学ぶ」という言葉を限定するほうが、「考える」、「行動する」、「気づく」との区別がついて、分かりやすくなると思う。
ギアモデルの説明の中で、各ギアをステップと呼んでいることから、ステップアップがされているかどうかを進行管理で評価する必要が出てくるのではないか。「今まではこの段階だったものが、もう一つさらに一段階上にステップアップした。」というような進行管理の仕方は考えられないかと思った。

（事務局）
ステップの「学ぶ」というところは滋賀県環境学習等推進協議会（以下「協議会」という。）でも議論されていて、協議会の委員からも、「学ぶ」の定義についての意見が分かれている。協議会でも、この言葉については、引き続き委員の皆様の意見を頂戴して考えていきたい。
ギアモデルのステップアップについての進行管理の方法については、どのようなことができるか考えさせていただきたい。

（委員）
資料の２の１７ページの「（２）一般廃棄物排出量、エネルギー使用量について」のグラフなどについて、計画期間そのものは、平成２８年から令和２年までの５年間ということになっているため、２８年度以降だけでいいものなのか、２４年から経年変化を見ていかないといけないのか、どうなのかも含めて、検討いただく必要があると思う。１８ページのまとめに「１人１日当たりの一般廃棄物排出量およびエネルギー使用量については低下傾向を示している」とあるが、グラフの整合性の部分が標記によって変わってくる。
また１７ページの全国の一般廃棄物の排出量は経年変化で下がってきているが、滋賀県の場合は逆に若干上昇傾向。コメントで理由を表記していただく必要があるのか、ないのか、そこも併せてご検討いた

だきたい。
　加えて、エネルギーの使用量も同じく、リバウンドで一時的に上がったものなのか、どうなのかなどのコメントもがあったほうがいいと思う。

（事務局）
　グラフについては、計画期間が分かるように訂正等をしたい。エネルギーの使用量や、廃棄物の排出量の分析についても、工夫したい。

（部会長）
　今の委員のご指摘だと、この計画期間で、あまりアウトカムは良くなかったということになってしまう。

（委員）
　資料２の６ページから７ページにかけて、エコロしーが「教えてくれる人」の情報について、毎年更新を今後はお願いしたい。

（事務局）
　エコロしーがについては、今年７月に新しくリニューアルオープンしたので、最新の情報を掲載していきたい。

（委員）
　環境学習の質の底上げの必要性を痛切に感じている。２０代の人たちと一緒に環境活動をしているが、若い世代のほうが意識が進んでいるため、世代交代を真剣に進めないといけない。現在の状況に付いていけない指導者の方に対しては、どのように質を上げてもらうかを真剣に考えないといけないと思う。

（事務局）
　例えば学校の先生などは、多忙で環境学習に真剣に取り組めない方もいるかと思うので、例えば、地域の方と一緒に連携して取り組むということで環境学習を推進していくというのも一つのやり方と考えている。地域などと全体で環境学習を推進していくことによって質の向上が図れるのではないか考える。

（委員）
　若い世代の意見を入れていただくようにお願いする。

（委員）
　資料２の９ページの「情報の提供」について、琵琶湖に関する情報というのは、ものすごく膨大なものがあるが、それが環境学習にどれだけ反映されているのか疑問に思う。最新の情報を一般の方に提供できるようなしくみというのをつくっていく必要があると思う。
　例えば、いろいろ相談があるとすれば、その相談を整理して、どういうニーズがあるかなどを整理し

て、次の展開に活かすということが必要。
問題は分かるが、だったら、どうしたらいいのかというところがなかなか一般の人には分からないところがあると思う。意外に何か活動したいと思っても選択肢があまりないと感じる。
では、どういうふうにそれを解消していくか。一つは、例えば、この環境学習センターや琵琶湖博物館に相談があった際は、全部を引き受けるのではなく、それをどこか専門家に繋ぐなど、ネット環境をうまく利用して、一般の方に情報を提供できるようなしくみを考えていただけたらと思う。
ワンストップで受け付けて他に繋ぐなど、そういうしくみで、この環境学習センターや琵琶湖博物館と連携すると、もう少し、「情報の提供」がうまく機能すると思う。

（事務局）
環境学習センターでは相談対応を受け付けていて、基本的には、その相談内容にお答えする指導者の方や、団体のご紹介をプラットフォーム的にさせていただいているところ。

（委員）
資料２の６ページから７ページにかけて、エコロしーが「教えてくれる人」の登録は、どんな期間で更新をしているのか。
更新頻度についても記載しておくほうが良いと思った。また、新たな方の登録をどのように呼び掛けておられるのかというところも記載があったほうがいいと感じた。

（事務局）
情報の更新の頻度については、変更があれば随時連絡をいただくかたちで対応している。その後は、小まめに連絡をくださる団体と、連絡がなくなる団体で二極化してしまっているというのが現状。今回以降、この新しいエコロしーがになってからは、現状のホームページの登録情報を直接登録団体が修正を申請していただくことができるように設定をしたので、１年未満のもっと頻度の高いリアルタイムの更新をしていきたいと考えている。また、年度末には、更新はないかを呼び掛けることを別途させていただきたいと思っている。
登録の指導者の発掘方法については、環境学習センターの推進員が環境に関するさまざまなイベントに出張するなどして情報を得て、アプローチ、取材、出張に行って登録を呼び掛けるというような発掘方法で実施させていただいている。

（委員）
コロナの影響のために環境学習などを縮小していることが多い中、何か、実施方法などで良い事例があれば少し載せていただけると参考になる。

（事務局）
コロナ禍でできる環境学習に関して、リモートを取り入れた環境学習を環境学習センターで実施した。リモートの手法を教えるような事業もセンターで実施しているので、こちらも幅広く伝えられるように今後は情報提供の部分に加えさせていただきたく。

（３）第四次滋賀県環境学習推進計画の進行管理方法について

〇事務局から資料３に基づき第三次滋賀県環境学習推進計画の進行管理について説明。

（委員）

資料３の６ページの「情報の提供」について、指標としては、ホームページに掲載している環境学習に関する情報のみでなくもう少し指標を増やしたほうがいいのでは。

その情報が実際にどのように活かされたかが反映されるような指標を追加したほうがよいのではないかと思う。

（委員）

資料３の１０ページの「地域別の環境保全行動実施率」について、北のほうが少ない。何か、考えていただけないかと非常に感じている。

資料３の１１ページの「環境保全行動実施率」はどういう質問の仕方なのか。

（事務局）

「あなたは環境保全行動をやっていますか」と質問しており、例として、昨年だと「環境保全行動とは、琵琶湖の清掃やヨシ刈り体験の参加、レジ袋をもらわないなど、環境保全のために行われる行動のこと」という注釈を付けてアンケートをしている。

（委員）

環境啓発に関する催しは、私たちが見ていると、南のほうではよく行われているが、北のほうでは少ないような気がする。

（事務局）

モニターアンケートの実質回答数などを見ると、絶対数に偏りがある。必ずしもこれが全てを反映しているものではないと思うが、アンケートで得た回答なので、これを参考に今後の施策を進めていく必要があると考えている。

（部会長）

資料３の１０ページに、県政モニターの地域別の回答者数が出ているが、湖北、湖西、甲賀のモニター数が少ないため、正確に南部と比べて同じ正確度でこのデータが出ているとは言い切れず、北部は駄目だということではないと思う。

このアウトカムの指標について、もう少し工夫したほうがいい良いと思う。県政モニターではなくて、この滋賀県環境学習推進計画として何かモニタリングするとどうか。

現在、インターネットなどを使いながら、県民の状況が分かるような、工夫をすると、アウトカムの評価も、もう少し正確になってくると思う。

（委員）
　ギアモデルについて、一つの事業でギアを回す方向でできないか。一つの事業が、「気づく」のみのように単発的で終わっているのが残念。
　各ライフサイクルの中で１周回っているという細かいギアを事業の中に、その内容なり、１年間を通してそういうことを考えていく考え方をしていただきたい。

（部会長）
　１回で終わりでなく、スパイラル的に知識も行動も成長していくことになると思う。その辺を考慮したらどうか、検討していただきたい。

（委員）
　環境学習の一番大事なことは体感するということではないかと思う。
　子どもたちが小さいときに体感する経験を県から学校現場の方に推奨していかないと、これからの子供たちは本当に琵琶湖に関心がなくなるのではないかと思う。

（部会長）
　コロナで対面での学習が難しくなっている状況だが、実際体で感じてみるということが大事だと思うので、コロナ禍でもアクティブな学習ができるような、仕組みづくりなどを県で推進していくと前に進んでいくのではないか。
　学ぶというのは、知ることだけではなく、体験を通じて学んだことが一番身について残っていくものだと思う。

（以上）